

真久原遺跡

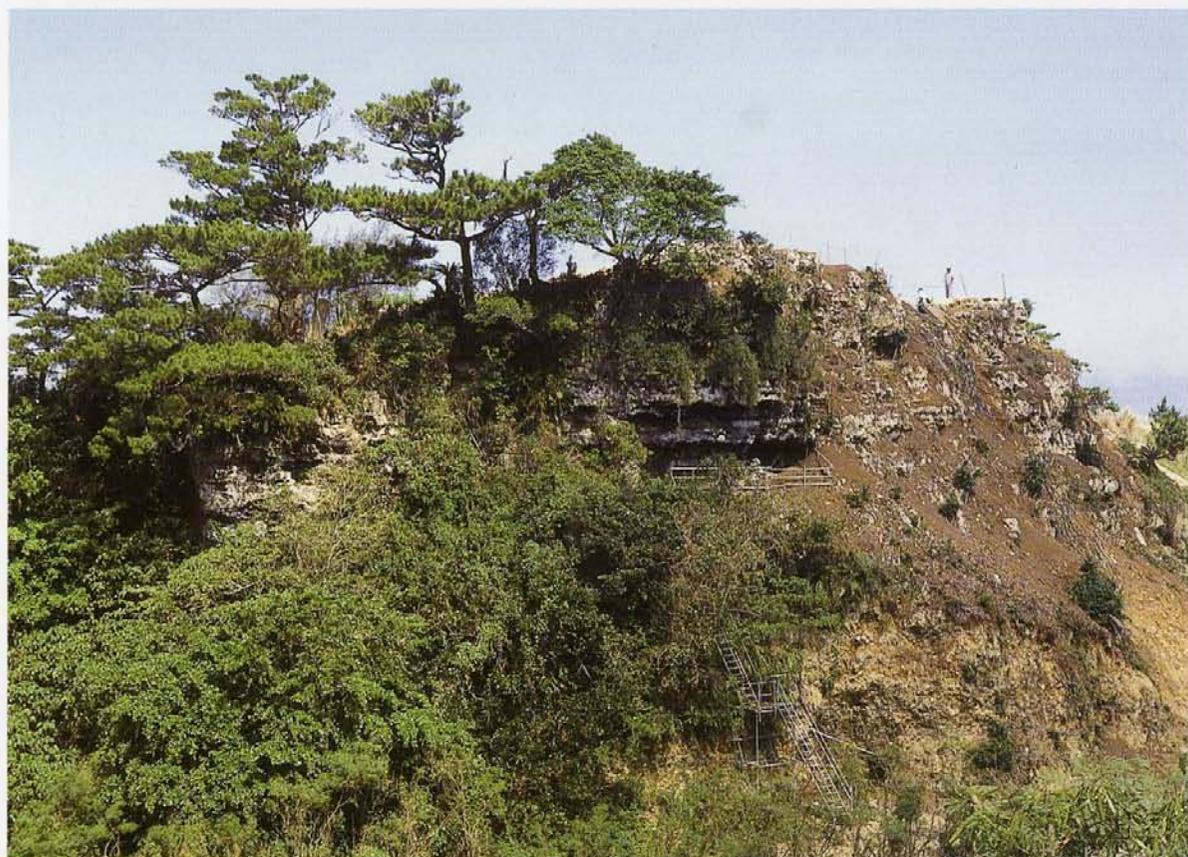
—老人保健施設「てだこ苑」建設に伴う緊急発掘調査—

1997年3月

沖縄県 浦添市教育委員会



真久原遺跡全景（北より）



真久原遺跡全景（東より）

例 言

1. 本報告書は平成8年度に実施した真久原遺跡の緊急発掘調査の内容を記録したものである。
2. 発掘調査は医療法人「陶門会」による老人保健施設建設工事に伴うもので、陶門会より依頼を受けて浦添市教育委員会が実施した。
3. 本書に掲載した調査地の現況図は株式会社総合計画設計より提供を受け、必要に応じて加筆修正したものである。また、1/10,000及び1/25,000の地形図は浦添市役所都市計画部所収の地形図を複製した。
4. 遺物の内、同定を必要とする石器の石質、動物遺存体については今回は割愛せざるを得なかった。それについては、別途報告したい。
5. 本報告書の執筆は第I章第1節を下地安広、それ以外を松川章が執筆し、編集は松川が行った。
6. 出土した資料については、浦添市教育委員会教育部文化課で保管している。

報 告 書 妙 録

ふりがな	まくばるいせき							
書名	真久原遺跡							
副書名	老人保健施設「てだこ苑」建設に伴う緊急発掘調査							
巻次								
シリーズ名	浦添市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	下地安広・松川 章							
編集機関	沖縄県浦添市教育委員会 教育部文化課							
所在地	〒901-21 沖縄県浦添市宮城2丁目4番1号							
発行年月日	西暦1997年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まくばるいせき 真久原遺跡	沖縄県 うらそえし 浦添市 あざいそ 字伊祖 こあざまくばる 子字真久原	47208		26° 15' 15.3331"	127° 43' 49.1094"	1996年7月8日 5 1996年8月20日	341㎡	老人保健 施設建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡		特記事項		
真久原遺跡	集落	グスク時代		土器 カムイ焼 青磁 白磁 古瓦 石器 滑石製棒状製品 鉄器 (刀子)				

目 次

例 言

目 次

第 I 章 調査に至る経緯	1
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査体制	1
第 II 章 遺跡の位置	3
第 III 章 調査の経過	5
第 IV 章 調査の成果	7
第 1 節 層 序	7
第 2 節 出土遺物	8
1 土 器	8
①貝塚時代後期土器	8
②グスク土器	8
2 カムイ焼	13
3 中国産磁器	14
①青 磁	14
②白 磁	16
4 褐釉陶器	16
5 沖縄産陶器	16
6 本土産磁器	16
7 古 瓦	17
8 石 器	17
9 鉄製品	19
10 自然遺物	19
第 V 章 まとめ	19
第 VI 章 古 墓	20
写真図版	21

第 I 章 調査に至る経緯

第 1 節 調査に至る経緯

医療法人「陶門会」より老人保健施設「てだこ苑」建設に伴う造成地で古墓が発見され、その取扱いについて市教育委員会へ問い合わせがあった。そこで、市教育委員会職員が現地に行き、古墓 2 基を確認した。しかし、造成地は周知の遺跡「真久原遺跡」の末端部である台地縁辺部を含んでいたため、続けて表面踏査を行い、掘削壁面から土器を含む遺物包含層を発見することとなった。

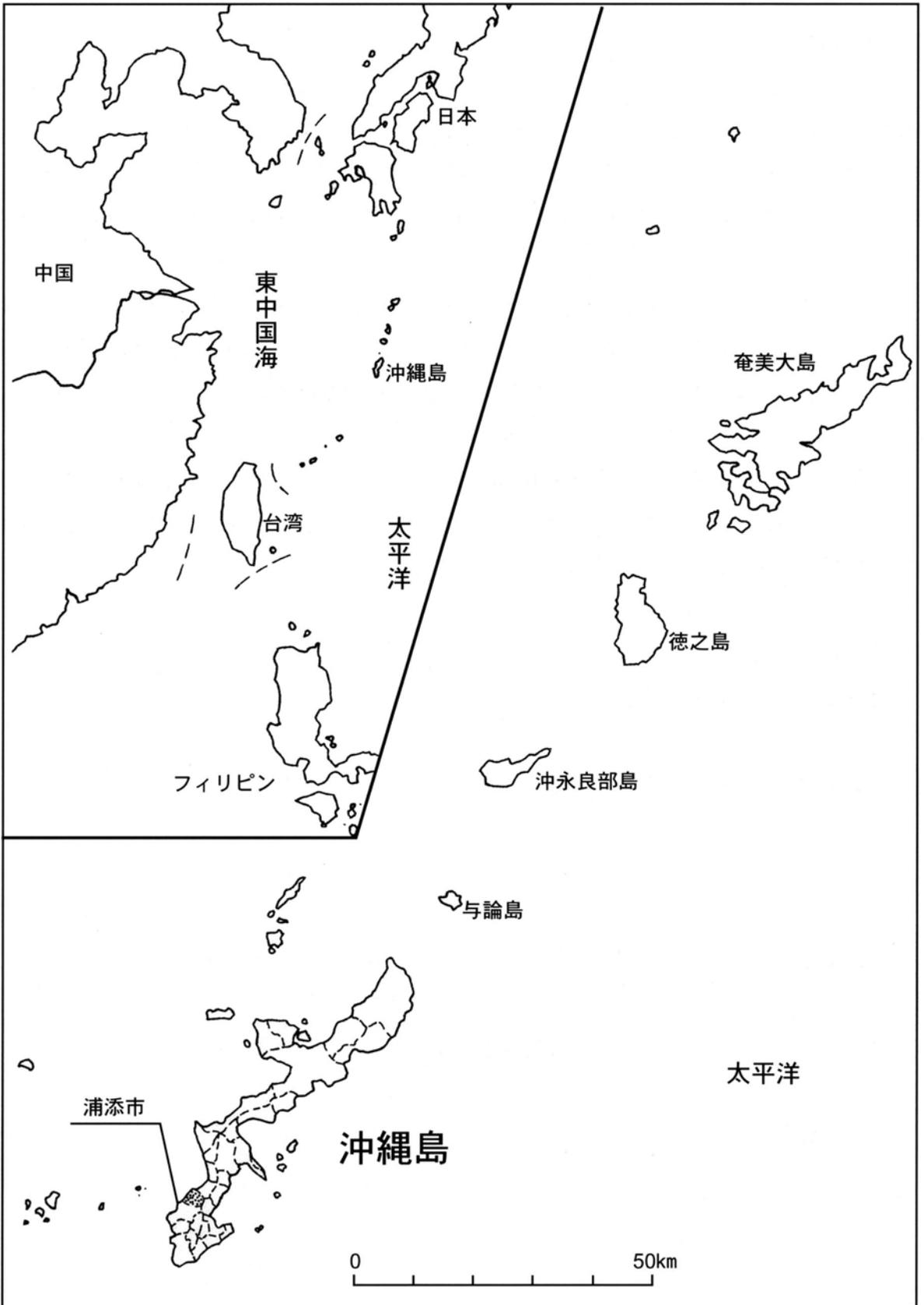
確認された埋蔵文化財の取扱いについては、市教育委員会と医療法人「陶門会」の間で協議を行ったところ、文化財のある小丘陵の造成工事は北側斜面下に建設する施設の安全確保と進入路設置のため必要であること、また当該建設工事は国庫補助事業であり、早急に発掘調査を行って欲しいと早期対応を求められる結果となった。

市教育委員会では他事業との業務調整を行い、医療法人「陶門会」と発掘調査に伴う諸々の事項について協議を行った後、双方で覚書を交わし、平成 8 年 7 月 8 日より同年 8 月 20 日までの間で発掘調査を実施することになった。

第 2 節 調査体制

本発掘調査は次の体制で実施した。

事業主体	浦添市教育委員会	教 育 長	福山朝秀
事業所管	”	教 育 部 部 長	西原廣美
事業総括	”	文 化 課 主 幹	安里 進
事務総括	”	文 化 財 係 係 長	下地安広
調 査 員	”	” 主 事	松川 章
”	”	” 臨時職員	中島徹也
整理作業員	”	” 臨時職員	宮国 正



第1図 浦添の位置

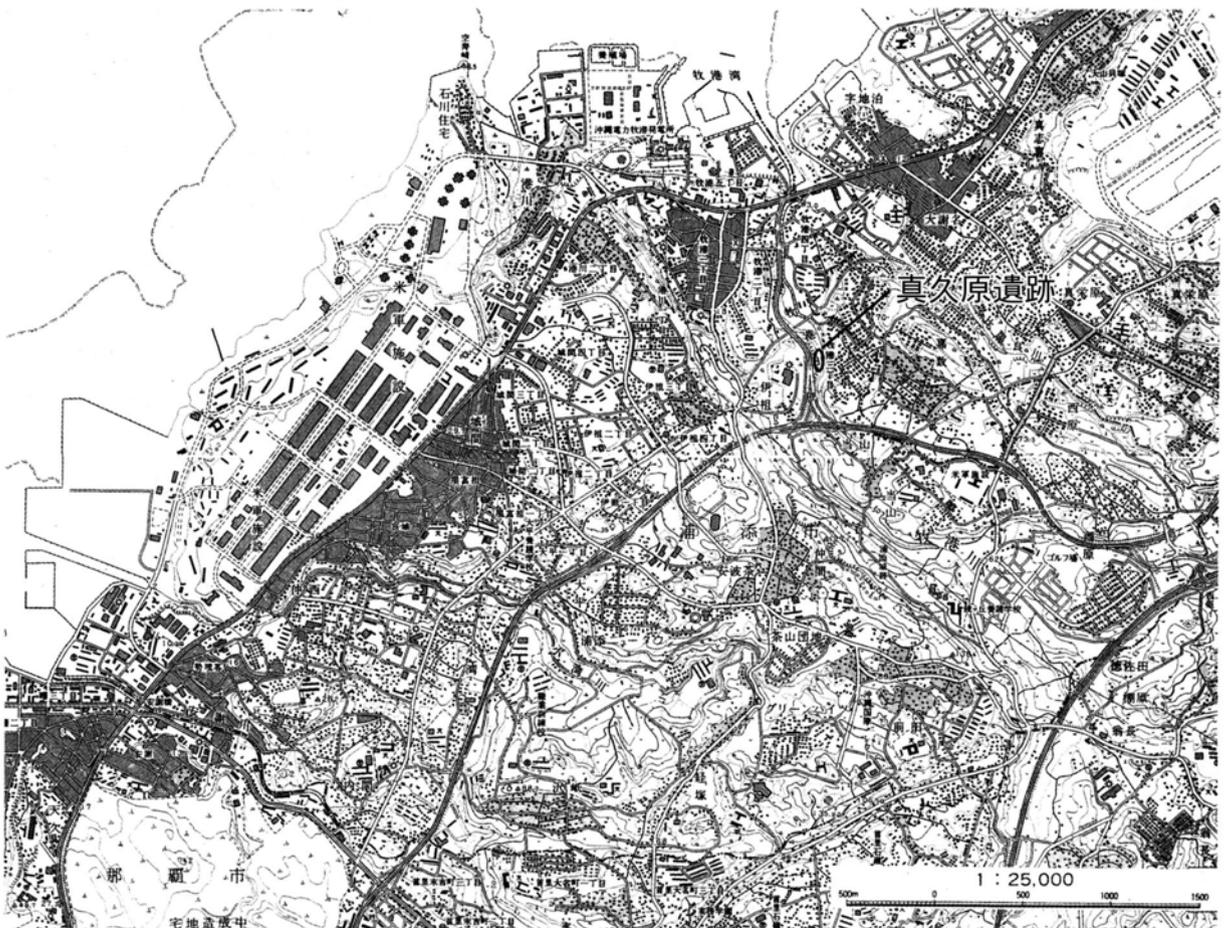
第Ⅱ章 遺跡の位置

真久原遺跡は1979年（昭和54年）、県道153号線バイパス工事に伴う分布調査で発見された遺跡で、同工事に係る緊急発掘調査が1983年に実施された。調査の結果、当遺跡は柵列と石積み（推定）の組み合わせられる13世紀後半から14世紀前半にかけてのグスク時代遺跡であることが判った（註1）。

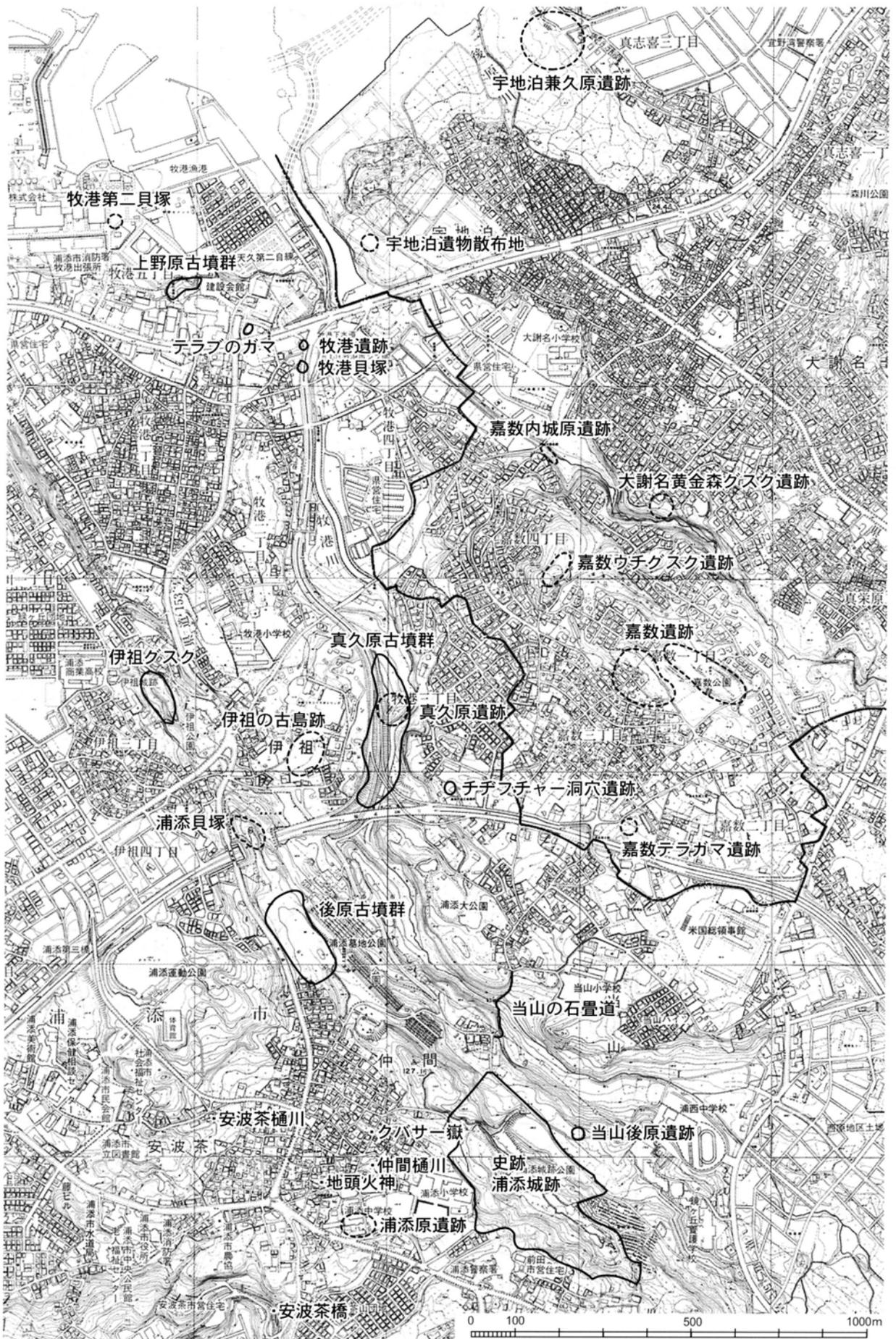
本遺跡は国指定史跡浦添城跡（東）から牧港（西）にかけての琉球石灰岩丘陵（浦添断層）のほぼ中央部を后背にした北東台地に位置し、その直下を東中国海に向かって牧港川が流れる。

遺跡周辺を見渡すと南には首里城以前の中山の王城であった浦添グスク、西には英祖王の生誕の地であり、石積み技法から古式のグスクとされる伊祖グスク、市来式土器の出土した浦添貝塚、伊祖グスク按司の恵祖世主の墓である伊祖の高御墓、南西に沖縄貝塚時代後期前半のチジフチャー洞穴遺跡、北に察度王代の貿易港と伝わる牧港と砂鉄の出土で知られる牧港貝塚が位置するなど遺跡の集中する地域にある。

今回、発掘調査を行った場所は県道153号線バイパス道工事の範囲外で、バイパスに東接する琉球石灰岩の小丘陵である。



第2図 遺跡の位置



第3図 真久原遺跡周辺の遺跡

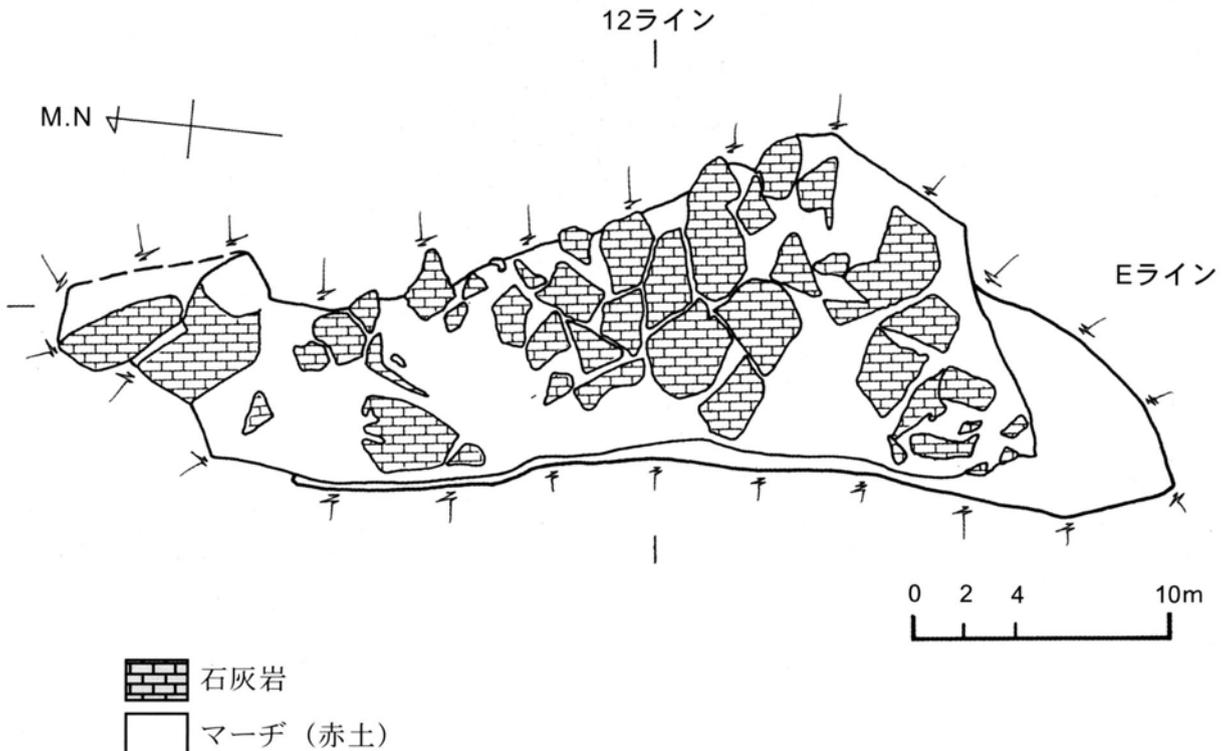
第三章 調査の経過

発掘調査は平成8年7月8日から同年8月20日の期間で実施した。調査は先ず台地上の遺跡の調査を行い、その後に古墓の調査を行うこととした。

調査に先立ち、当該施設の建設会社の協力で伐採と基準点を東西端と南北端の4カ所に座標を持つ基準杭を設定していただいた。初日は台地上西側の産業廃棄物の除去を行ない、その後ほぼ南北の基準ラインを通る1辺2mのグリッドを組んだ。発掘は石灰岩の露頭ののないCライン以南から始めたが、遺構は検出されなかった。その後、石灰岩上やその間隙に堆積する暗褐色土の発掘を進めた。西側では岩盤上とその北側斜面に堆積する暗褐色土からの遺物の採集を行った。また石灰岩の間隙（第4図参照）からチャート片の発見があり、石灰岩一帯に堆積する暗褐色の腐葉土は発掘することにした。

柱穴等遺構の検出はなく、遺物として滑石製の棒状製品とチャート片が特色あるもので、ほかに青磁、白磁、グスク土器、石器が出土した。層序の実測と平板測量を行った。

台地上の調査も終盤に近づき、古墓調査着手の準備を整えたが、古墓内は風化が著しく、頭上の石灰岩の剥離もみられ内部で発掘調査を実施するには危険な状況であったため、写真撮影と平面の略測を行い、調査を終えた。



第4図 発掘調査後の岩盤露出状況

第IV章 調査の成果

第1節 層序

当該地はE-10グリッドを頂点に周辺へ緩やかに傾斜し、またCライン以北は琉球石灰岩が露頭する。遺物包含層は西端の掘削壁面に僅かに残るのみで台地上では確認されなかった。遺物は西端の黒褐色土層と石灰岩間の間隙（第4図参照）の暗褐色土からの出土である。また、砲弾片や産業廃棄物の出土もあった。

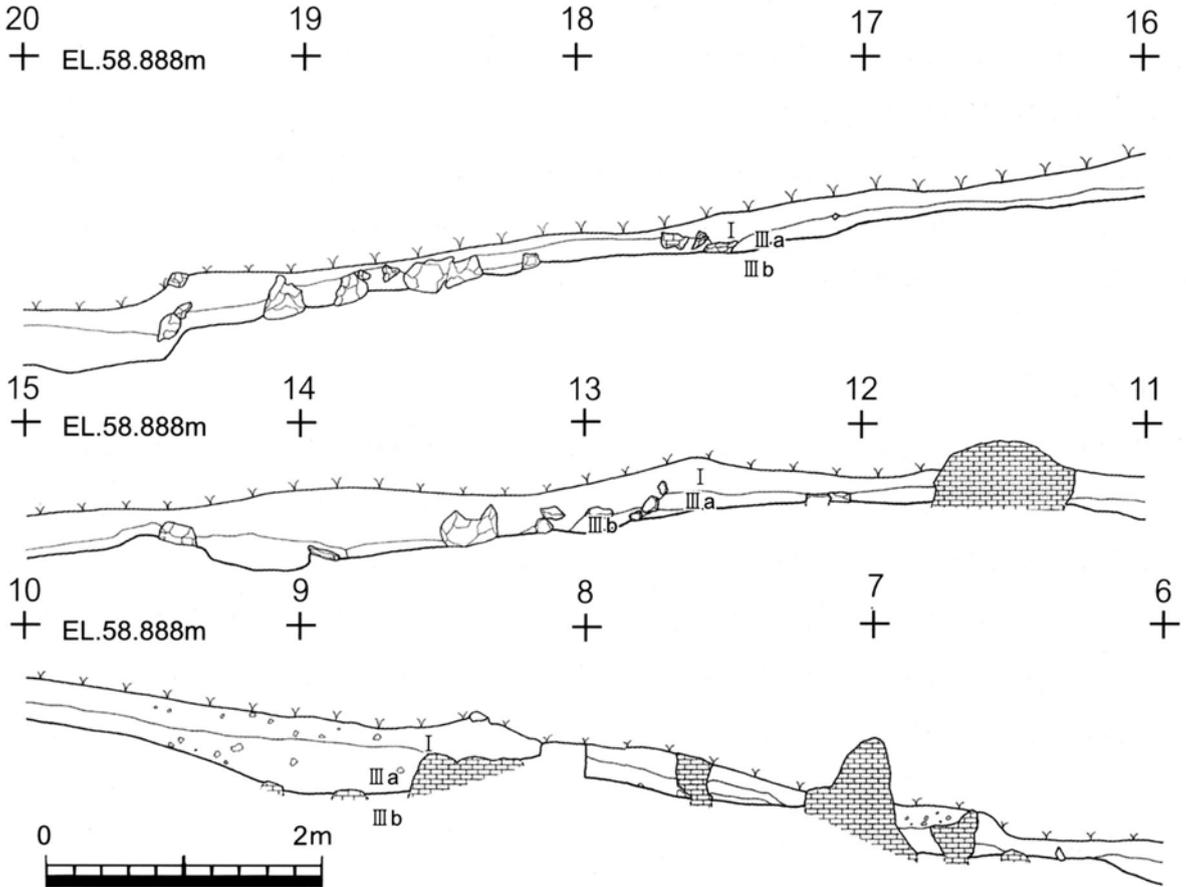
以下、層序について述べる。

第I層 石灰岩の露頭しないCライン以南に認める茶褐色土層で、砲弾片や戦後の鉄クズ等の産業廃棄物等が多く出土し、ほかに少量の陶器や土器片もある。

第II層 黒褐色土層で、調査地西端に見られるものである。

第III層 a 淡黄色土で地山移行層である。

b 赤褐色のマーヅ土で、本調査地の地山層である。



第6図 Cライン層序

第2節 出土遺物

表1 遺物出土表

今回の発掘調査で出土した遺物は貝塚時代後期土器、グスク土器、カムイ焼、青磁、白磁、褐釉陶器、石斧、叩き石、石皿、滑石製品、鉄製品、貝殻等である。調査箇所が遺跡の末端部にあたるため遺物の出土量は概して少ない。出土層位については前節で既述したように西端の遺物包含層と露頭する琉球石灰岩上とそ間隙、斜面地からの出土であり、記述にあたっては出土グリッドのみ記述することにする。

種別	数量
貝塚時代後期土器	1
グスク土器	803
カムイ焼	11
青磁	19
白磁	3
褐釉陶器	1
本土産磁器	7
沖縄産施釉陶器	3
沖縄産無釉焼き締め陶器	17
古瓦	2
石器	11
鉄製品	1

以下、各種別に記述する。

1 土器

① 貝塚時代後期土器

第9図19に示す底部資料1点が得られている。胴下部に向かって外底面より直線的に立ち上がる。胎土は泥質で、混和材はみられない。焼成良好、器色は外面褐色、内面橙褐色を呈する。F-15グリッドの出土。

② グスク土器

総数803点の出土があり、口縁部20点、胴部764点、底部19点である。資料のほとんどは小破片で、すべて無文資料である。

器種は壺形、甕形、鉢形の3種が認められる。量的には鉢形13点、甕形6点、壺形2点であった。胎土は砂質と泥質の2種がみられるが、器種との相関関係は認められない。資料の中には滑石を混和材とした胴部資料が1点得られている。

壺形土器

第7図1・2に示す2点が得られている。1は無頸で、ナデ形の器形である。口唇部は平坦に仕上げられ、僅かに外反する。内面は横位にヘラ整形されるが、製作時の継ぎ目を明瞭に残す。器色は外面褐色、内面黄褐色を呈する。E-22グリッドの出土。

2は口縁部が外反するもので、推算口径13.6cmを測る。胎土は砂質で混和材として黒色鉱物（長石？）、石英微砂粒、赤色粒を認める。器面の磨耗のため調整痕は窺えない。器色は内外面とも淡い橙褐色を呈する。G-10グリッドの出土。

甕形土器

6点の出土があり、4点を第7図3～6に図示する。胎土はいずれも泥質で、焼成良好である。3は器厚が4と薄いもので、内外器面は細かいアバタ状を呈する。器形としては甕形で

あるが、器厚からするとミニチュア土器の可能性もある。D・E-22グリッドの出土。

4も器面がアバタ状をなすもので、胎土は泥質である。外反した口縁部の内面は「く」字形に屈曲する。器面に調整具の痕跡は認められず、ナデ仕上げされる。混和材はみられない。器色は外面橙褐色、内面黄褐色。E-21グリッドの出土。

5は頸部より口縁部の器厚が厚いもので、内面にはヘラ状工具による平行調整痕を残す。混和材は見られず、器色は橙褐色を呈する。F-21グリッドの出土。

6は口縁部が緩やかに外反するもので、口唇部は丸く仕上げる。器面はナデ仕上げされるものの全体として不良である。混和材として赤色粒を含み、器色は橙褐色を呈する。E-21グリッドの出土。

鉢形土器

13点の出土があり、小片の1点を除く12点を第8図に示した。本種は口縁部が①内湾するものを基本形とするが、②直口するものもあり、また口縁上部に瘤状突起を有する資料とそうでない資料もある。胎土は砂質と泥質の2種が見られ、12点は後者に属する資料である。いずれも器面はアバタ状を呈し、焼成良好である。

口縁上部に瘤状突起が認められるのは8・10・11の3点で、いずれも突起上部は口縁端に接する。8は口縁部が若干屈曲するもので、口唇部は丸く整形される。瘤状突起は縦長の方形を呈し、上端と下端で器面に貼り付けられる。器面に工具を使った調整痕は見られない。器色は内外面とも褐色を呈する。E-21グリッドの出土。

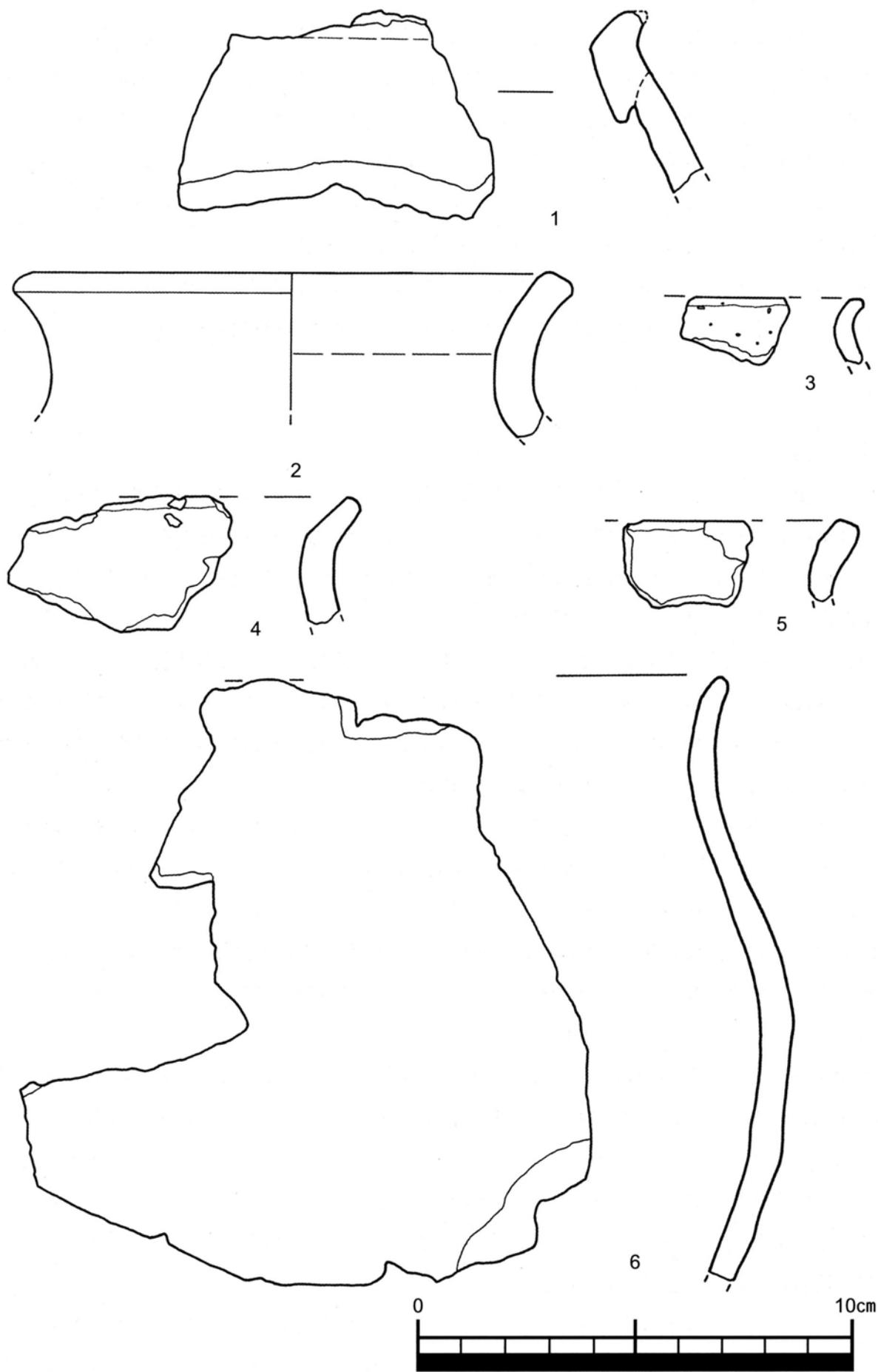
10は本種の中では他と異なるもので、口縁部が直口する鉢形土器である。ほぼ縦長の突起は口縁端より貼り付けられる。アバタ状の器面は他の資料よりは著しく、器面調整痕は窺えない。器色は内外面とも橙褐色を呈する。E・F-12・13グリッドの出土。

11は内湾する口縁端が舌状に整形されるものである。瘤状突起は頂部の平坦な円錐形をなす。器面に工具調整痕は見られず、ナデ仕上げかと考える。焼成良好で、器色は内外面とも橙褐色を呈する。E・F-8グリッドの出土。

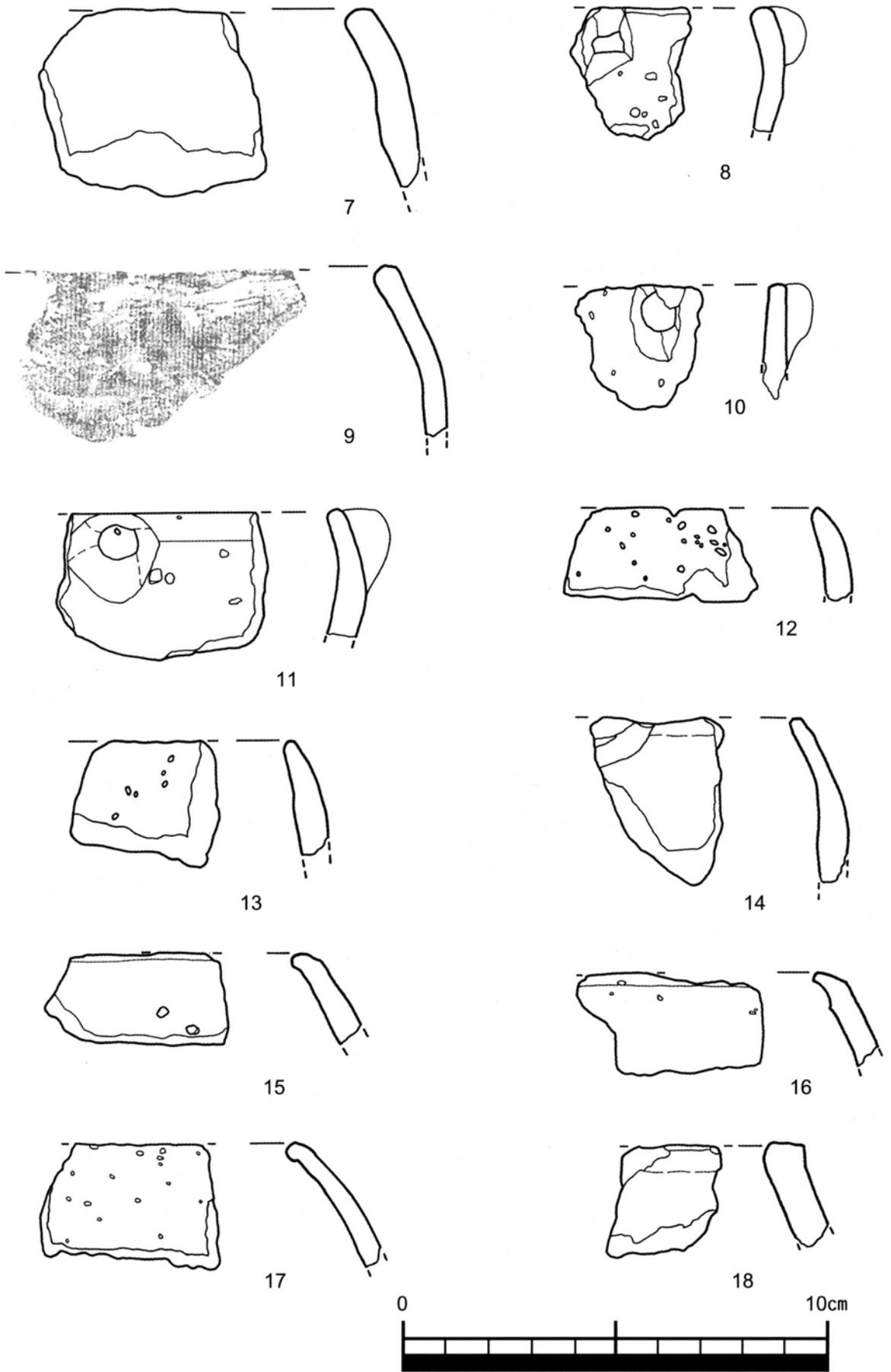
瘤状突起の見られない資料を7・9・12～18に示した。前述したように鉢形土器は①口縁部が湾曲するものと、②直口するものの2種に器形分類される。7は前者に分類される資料で、口唇部は丸く仕上げられる。外面はナデ仕上げされ、内面にハケ目を認める。器色は橙褐色を呈し、焼成良好である。F-20グリッドの出土。

9は②に分類されるもので、内外面にハケ目を認める。器色は黄褐色を呈し、混和材として石英の微砂粒を含む。表採。

12～14は口唇部が舌状をなすもので、12・14は①に器形分類され、13は②に含まれるものである。14は内面に斜位の調整痕（ハケ？）が認められる。器色は12が黄褐色、13・14は橙褐色を呈する。12は表採、13はD・E-23・24グリッド、14はE-21グリッドの出土である。



第7図 グスク土器



第8図 グスク土器

15・16は口縁部の内外面に特徴が見られるもので、器形分類①の資料である。湾曲する口縁部外面は上部で屈曲し、口唇部は内外面よりヘラ調整され鋭角になる。内面の上部では僅かに段差を作るが、特に16は工具により内面の口縁上部に幅7mmの凹線を施す。15は砂質胎土で、器色は橙褐色を呈する。F-21グリッドの出土。16は泥質胎土で、器色は淡い橙褐色である。D・E-23・24グリッドの出土。

17は内面の口縁上部が15・16と同じく、僅かな段差を作るものである。器形分類②の資料である。アバタ状を呈する器面は他の資料より著しく、したがって器面調整痕は窺えない。器色は淡い黄褐色を呈する。D・E-23・24グリッドの出土。

18は②に分類される資料で、口唇部は平坦に整形される。胎土は泥質で、器色は橙褐色を呈する。F-20グリッドの出土。

底部

19点の出土があり、その内の6点を第9図に示した。器形から①外底面から弧を描きながら胴部へ移行するもの、②外底面から直線的に胴部へ移行するもの、③外底面からの立ち上がりで僅かにくびれて胴部へ移行するものがある。19点の資料中8点が小片のため不明であるが、①に分類されるものは7点、②は2点、③は2点であった。胎土は砂質6点、泥質13点である。

20・21・23・24が底部器形分類の①に属するもので、器面の内外はアバタ状を呈する。20は泥質胎土で混和材はみられない。器色は外面褐色、内面橙褐色である。E-21グリッドの出土。

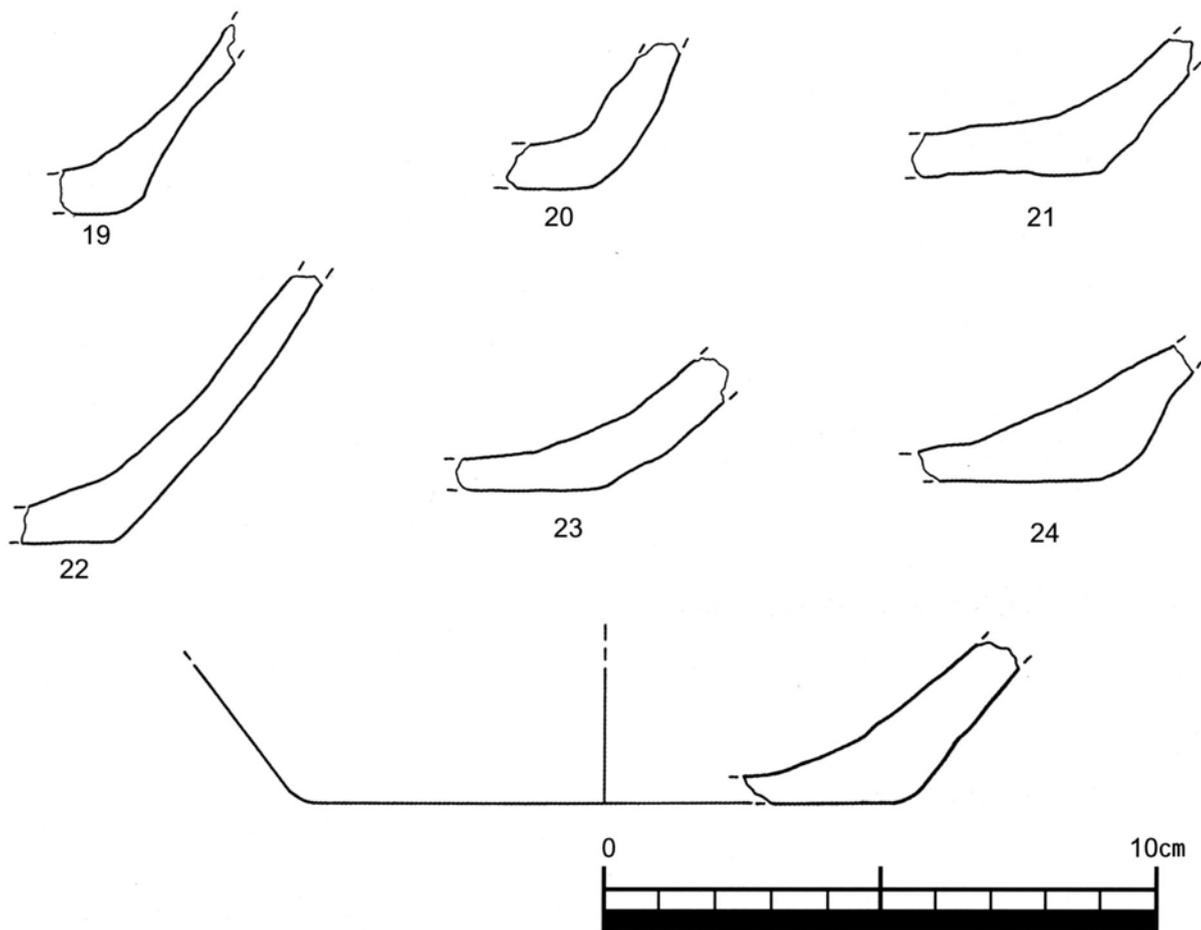
21は外面に横位のハケ目調整痕の見られるもので、胎土は砂質を呈する。混和材として石英の微砂粒を含む。外面橙褐色、内面黄褐色を呈する。E・F-23・24グリッドの出土。

23は外面がヘラ仕上げされるもので、横位方向の稜を認める。胎土は泥質で、器色は外面褐色、内面黄褐色である。F-20グリッドの出土

24は胎土が泥質で、混和材はみられない。外面の仕上げは雑で、調整痕等はみられない。器色は外面橙褐色、内面黄褐色である。E-23グリッドの出土。

22は分類②に含まれるものである。胎土は砂質である。器面調整は外面下部では横位、上部では縦位方向の条痕が見られ、内面は底面に横位、胴部に斜方向の交差する調整痕を認める。E-22・23グリッドの出土。

③に分類されるものは2点で、そのうちの1点を25に示した。胎土は砂質で、混和材として長石と石英の微砂粒、赤色粒（鉱物？）を含む。器面摩耗のため調整痕は窺えない。器色は黄褐色を呈する。F-9グリッドの出土。



第9図 土器底部

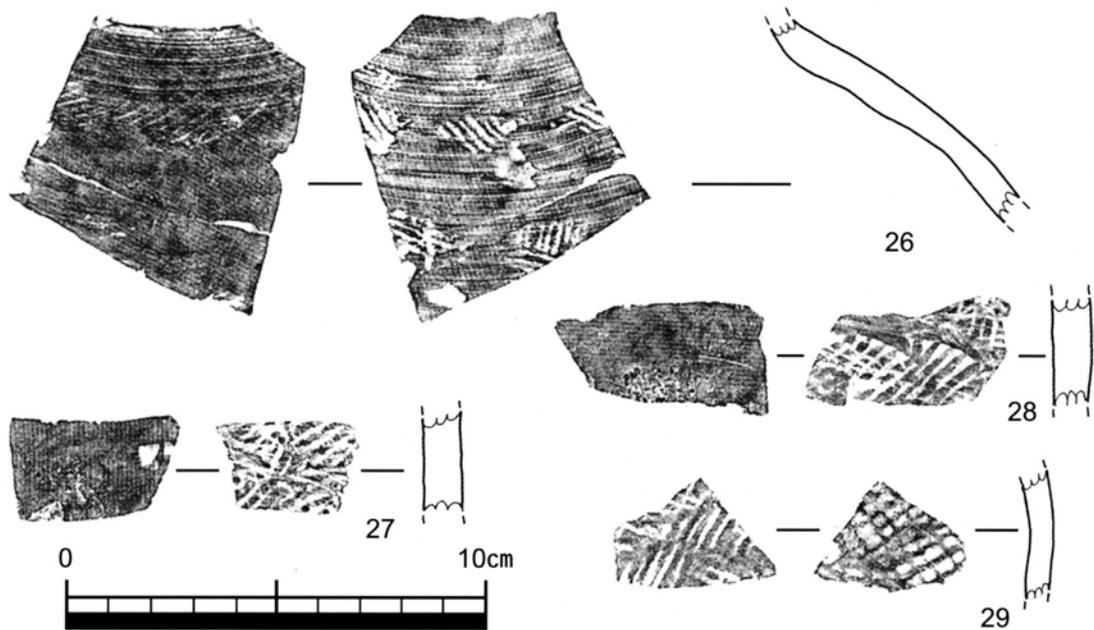
2 カムィ焼

奄美諸島から先島諸島まで分布する須恵質の焼き物で、11点が得られ4点を第10図に示した。器種の判明するのは壺形の1点のみで、他は小片の胴部資料である。いずれの資料にも叩き目を残す。平行線叩き目が多用され、轆轤回転によるナデ消しを行っている。回転ナデ消しは外面では徹底するものの、内面は雑で叩き目を明瞭に残す。

26は唯一器種の判明できるもので、壺形の肩部資料である。内外面には平行叩き目を施した後、轆轤回転によるナデ消しを行う。内面は外面に比べ仕上げは悪く、器面は凹凸があり叩き目を明瞭に残す。E-22グリッドの出土。

27・28は内面に重なり合った平行叩き目を残す胴部資料である。外面は丁寧に仕上げられ、器面調整痕は認められない。27はD・E-10グリッド、29はD-10グリッドの出土。

29は採集資料の中で器厚が6mmと最も薄いもので、外面に平行叩き目、内面に格子状の叩き目を残す。D・E-23・24グリッドの出土。



第10図 須恵器

3 中国産磁器

①青磁

19点の出土があり、内訳は口縁部6点、胴部11点、底部2点であった。器種は無文で口縁部の外反する碗である。口縁部5点と底部2点を第11図に示した。

30は舌状に成形された口縁上部で葉先様に外反する薄手の資料である。灰白色細粒子の素地に淡青緑色釉が施釉される。内外面に轆轤回転痕と貫入を認める。F-10グリッドの出土

31も口縁上部で外反するものである。素地は灰白色細粒子で、淡青緑色釉を施釉。F-20グリッドの出土。

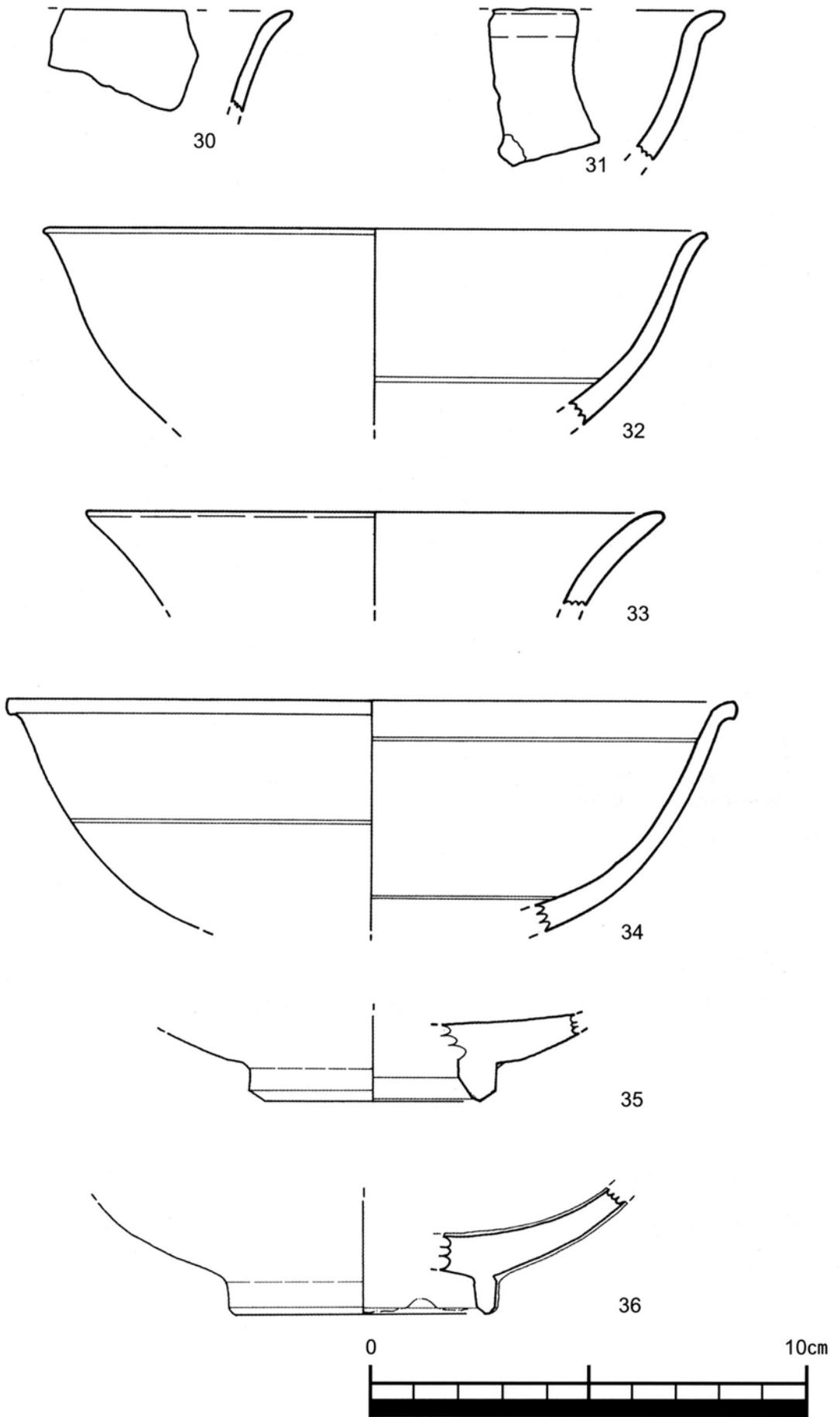
32は微弱な外反を示すもので、推算口径は12.2cm。外面に轆轤回転痕を認める。内面腰部に1条の圈線を巡す。淡青緑色釉を施釉し、貫入はない。素地は灰白色粒子。F-9グリッドの出土。

33は推算口径15.4cmを測る外反口縁碗である。淡緑色釉が施釉され、貫入はみられない。素地は灰白色微粒子。C-14グリッドの出土。

34は玉縁状に肥厚した口縁部が微弱に外反するもので、推算口径17.0cmを測る。外面胴部と内面の底面及び口縁上部にそれぞれ1条の沈線を施す。外面に轆轤回転痕を明瞭に残し、灰色微粒子の素地に淡青緑色釉が施釉される。貫入はない。D・E-22グリッドの出土。

35は推算底径5.6を測るものである。高台脇は直角に仕上げ、畳付は内と外より削られ「V」状をなす。高台内削りが浅く底部は厚い。内底面に文様はない。灰白色微粒子の素地に淡黄緑色の釉が施釉されるが、畳付と高台内側は露胎である。貫入はない。E-9グリッドの出土。

36は推算底径6.4cmを測る碗の底部である。文様は施されず、淡緑色釉を施釉後に高台内と外

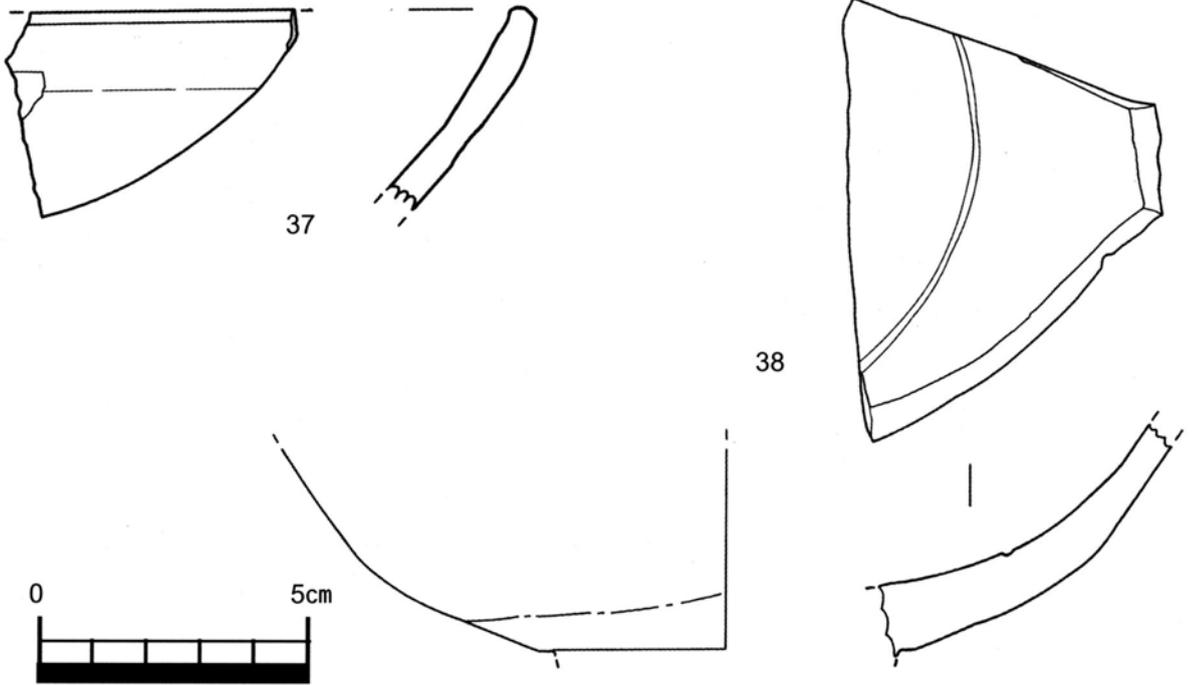


第11図 青磁

②白磁

口縁部1点、胴部2点の計3点の出土がある。第12図37は口縁部の内湾する碗で、外面は轆轤整形時の微弱な横位の稜が残る。淡灰白色釉が施釉され、内外面には細かい貫入が見られる。素地は淡灰白色の細粒子。F-13グリッドの出土。

38は胴部の資料で、内底面に1条の圏線を認める。淡青白色の釉は外面胴下部を除く内外面に施釉される。貫入はなく、素地は白色微粒子である。D・E-23・24グリッドの出土。



第12図 白磁

4 褐釉陶器

図版11-39に示す胴部資料の1点が得られている。素地は淡灰色微粒子で、淡茶色の釉が施釉される。E・F-13・14グリッドの出土。

5 沖縄産陶器 (図版12)

施釉陶器3点、無釉焼き締め陶器17点、アカムヌと称される軟質陶器7点の合わせて27点が採集されている。

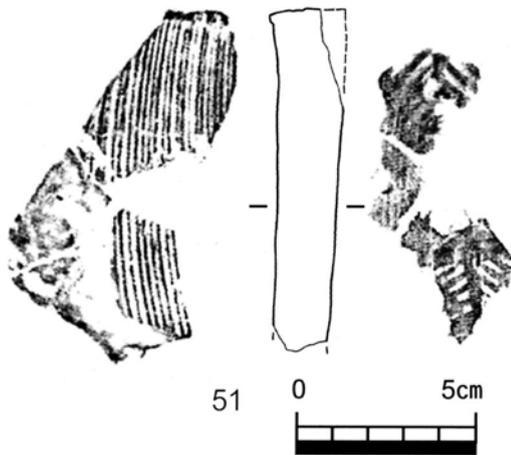
6 本土産磁器 (図版13)

沖縄でスンカンマカイと称される砥部焼きを含む7点が出土している。

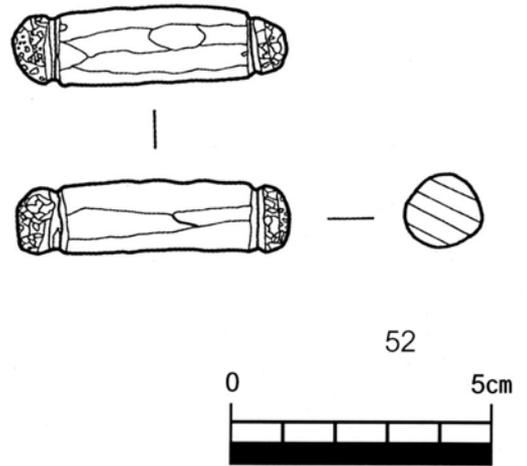
7 古瓦

いずれも平瓦の破片資料2点が得られ、1点を第13図に示した。

51は高麗系瓦と称されるもので、外面に羽状の叩き目、内面にはハケ目が施されている。色調は淡灰色。F-9グリッドの出土。



第13図 古瓦



第14図 滑石製品

8 石器

石斧2点、叩き石2点（磨石兼用1点）、磨石2点、石皿2点、小片不明2点、滑石製品1点の合わせて11点が得られている。また図版16に示すチャート片8点の出土がある。

第14図に図示するものは滑石製の棒状製品で、滑石製品（石鍋？）の破片の再生品と考えられる。縦方向に削り出した後、両端に袂りが設けられ、紐による緊縛が想定される。類似資料については素材は異なるが枝サンゴ製のものが勝連町平敷屋古島遺跡（註1）で浮子として報告されている。

石斧は第15図54・55に示す2点を得られた。いずれも刃部破損の基部資料である。54は横断面が楕円形を呈するものである。基端と裏面の一部に敲打痕を残すものの大部分は研磨仕上げされる。E・F-11グリッドの出土。

55は扁平石斧の基部資料で、所々に製作時の敲打痕と剥離痕を残すが、基端と両側面を含む全面に研磨が施されている。C-14グリッドの出土。

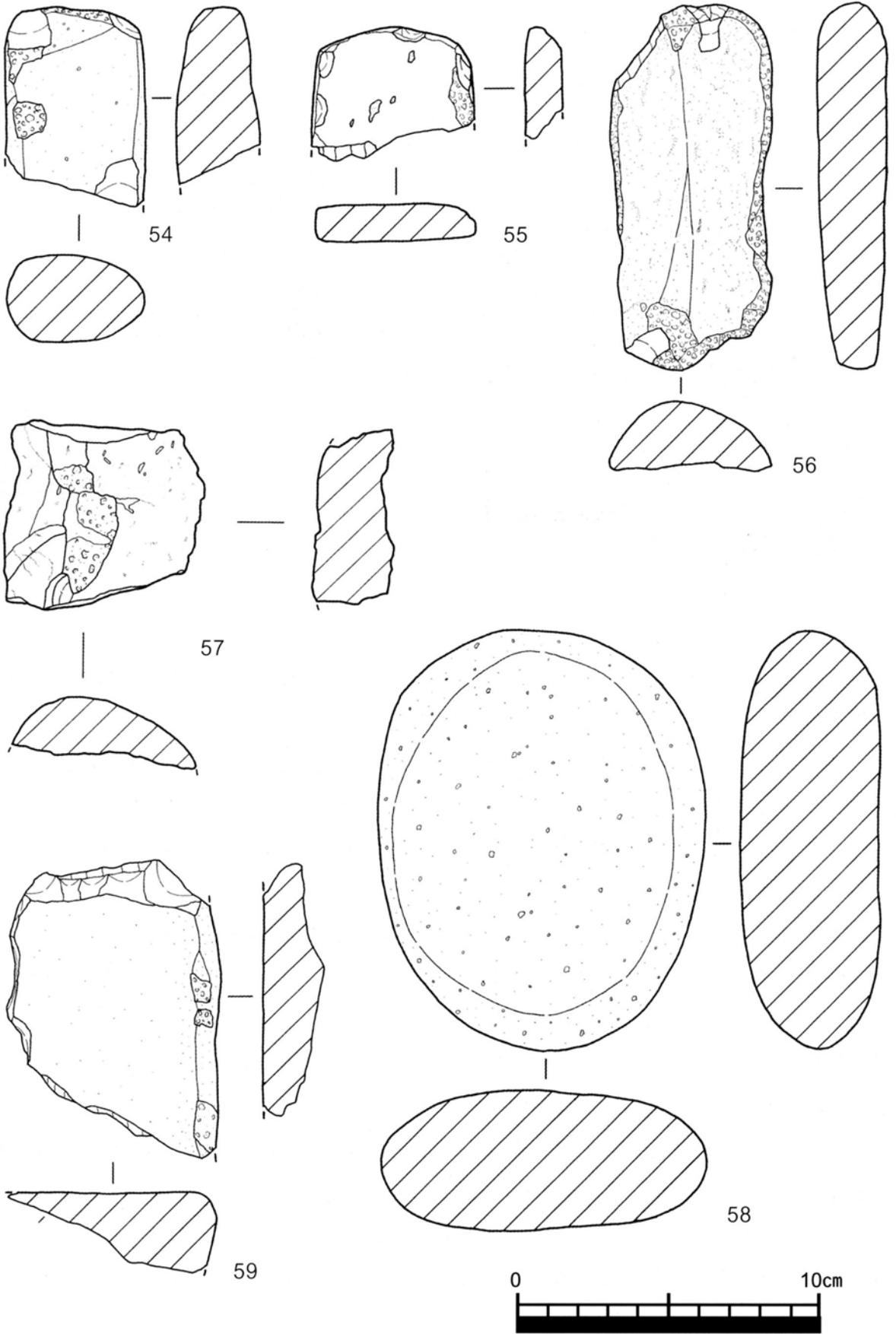
叩き石1点を56に示した。節理面より縦方向に割れたもので、上下端と両側縁を敲打部位として使用する。D-8グリッドの出土。

57は叩き石と磨石を兼用するもので、表採品である。

58は平面形が楕円形をなす磨石で、完形品である。重量は1002gを量る。C・D-12・13グリッドの出土。

59は石皿の破損品で、表面は使用により滑らかな面を呈する。D-8・9グリッドの出土。

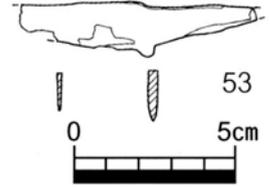
(註1) 勝連町教育委員会『平敷屋古島遺跡』発掘調査報告書 1991年3月



第15図 石器

9 鉄製品

第16図に示す刀子状の製品が得られている。腐食が著しいが刃部と柄部の上に小さな突起がつくられている。E-13グリッドの出土。



第16図 刀子

10 自然遺物

海産貝はヒレジャコ（1点）、イトマキボラ（1点）、リュウキュウサルボウ（1点）、ヌノメガイ（2点）、ハマグリ（2点）の出土がある。

獣骨は37点の出土がある。主に調査区南側一帯で採集され、戦後のものかと考える。

第V章 まとめ

真久原遺跡の発掘調査は、老人保健施設「てだこ苑」建設に伴う造成工事に関連して発生した緊急発掘調査であった。

真久原遺跡については昭和58年に発掘調査が実施され、柵列を有する13世紀後半から14世紀前半にかけてのグスク時代遺跡として知られ、浦添城跡の支城的役割が想定されている（註1）。

発掘調査は前回の調査範囲から外れた台地の北側縁辺である。調査地の大部分は琉球石灰岩が露頭しているため発掘調査の範囲は限られたものであった。

発掘調査の結果、遺構は検出されなかった。遺物包含層は調査区西端に僅か残る程度で、調査区の大部分では確認されなかった。しかしながら、図版4に示すような石灰岩の侵食でできた間隙から土器、石器、チャート片が採集された。また、安全帯を身につけて調査できた台地崖面のテラスにおいても比較的多くの土器が採集できた。

遺物は土器、石器、滑石製棒状製品、青磁、白磁等で、遺跡の末端部であり出土量は僅少であった。

土器は貝塚時代後期土器とグスク土器が得られ、後者は壺形、甕形、鉢形の3種がある。特に鉢形土器の中には口縁上部の整形に調整具を用い、尖状に口唇部を整形するものがみられた。

石器は石斧や叩き石等11点が得られた。滑石製の棒状製品は両側に紐で緊縛するための袢があり、錘になるかと考えられる。

青磁と白磁は合わせて22点の出土があった。青磁は口縁部の外反する無文碗、白磁は内湾する口縁部資料で、14世紀代におさまる資料である。須恵器は11点の胴部資料が得られた。内外面に平行叩き目が見られるものである。

出土した遺物は少ないものの前回実施された発掘調査で得られた遺物の範囲内にあるが、滑石製の棒状製品は本遺跡における新しい発見である。

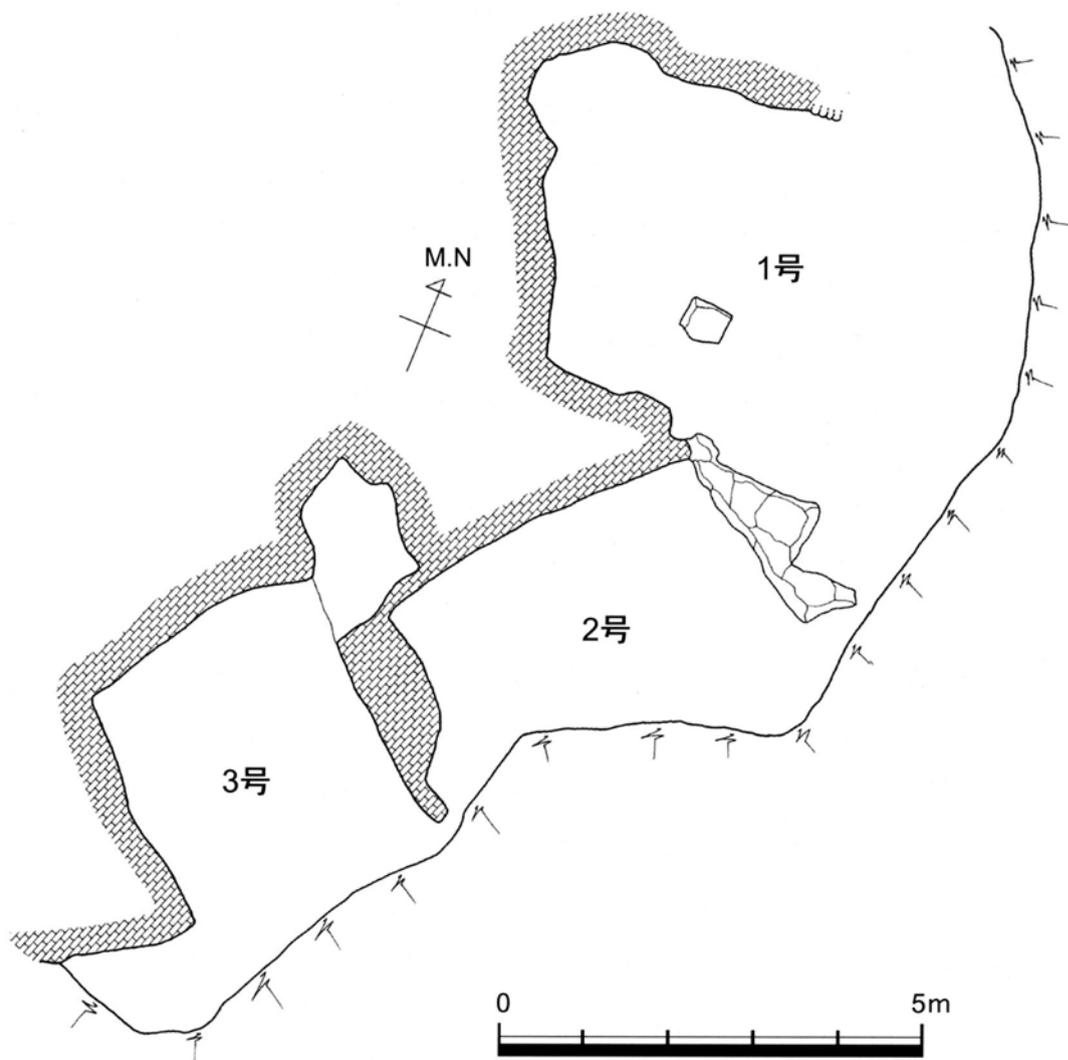
（註1）『牧港貝塚・真久原遺跡』 沖縄県教育委員会1985年

第VI章 古 墓

1983（昭和58）年の真久原遺跡の発掘調査において、28基の古墓の調査が実施された。一帯の古墓群は真久原古墓群として周知されている古墓群である。牧港川に面する北東崖の中腹に位置する。

今回調査した古墓は発掘調査した台地の北東側の崖中腹に位置する3基の掘り込み墓である。当初、発掘調査を実施する予定であったが、崖中腹の高所にあること、内部の風化が著しく崩落の危険が考えられることから写真撮影と略測でもって調査を行うことにした。

3基の掘り込み墓はいずれも崖の中に位置し、前面の囲いは既になく、また蔵骨器も認められなかった。1号墓は墓口の石と西側の側壁の石積みを残す。1・2号墓とも墓室は平坦でタナは見られない。3号墓の墓室は通路より高く、また墓室右側に小穴があり、壕として使用された墓と考えられた。

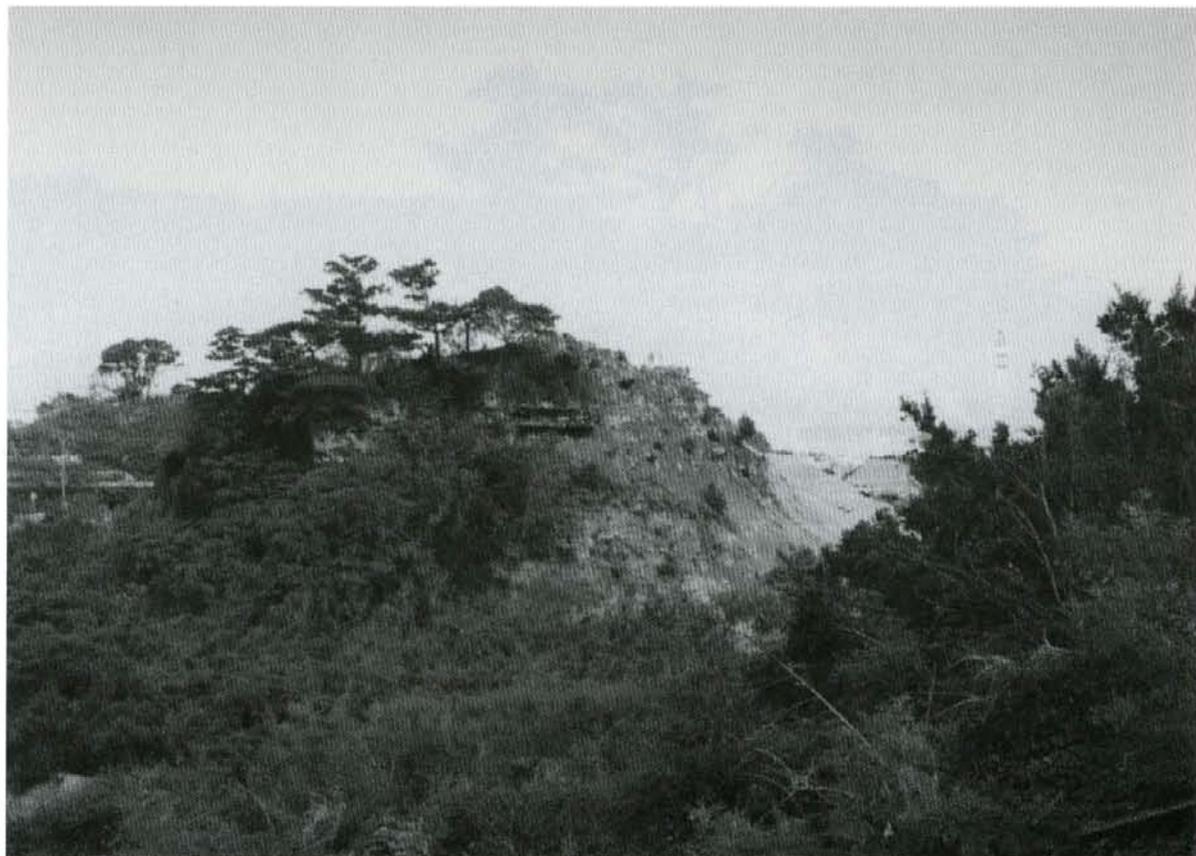


第17図 古墓略側図

写 真 图 版



図版1 遺跡遠景（南より）



図版2 遺跡遠景（東より）



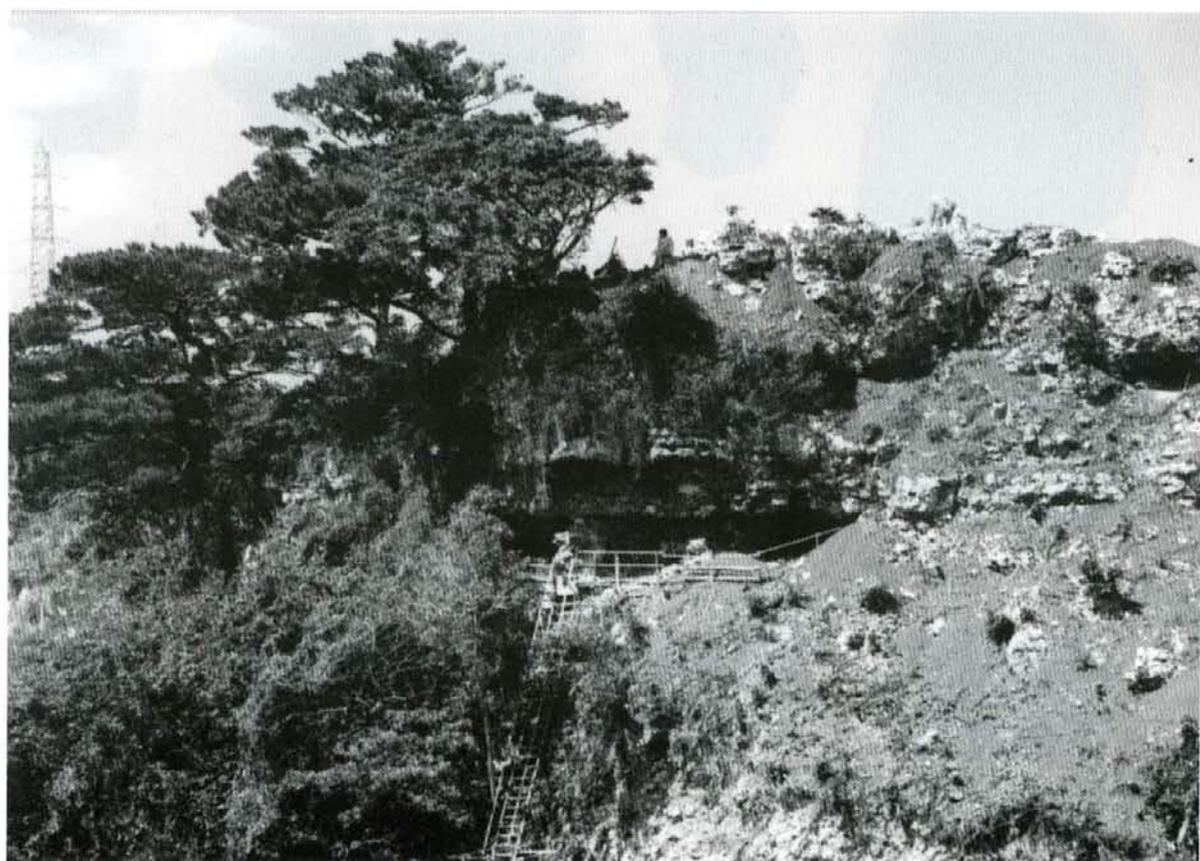
図版3 遺跡全景（北より）



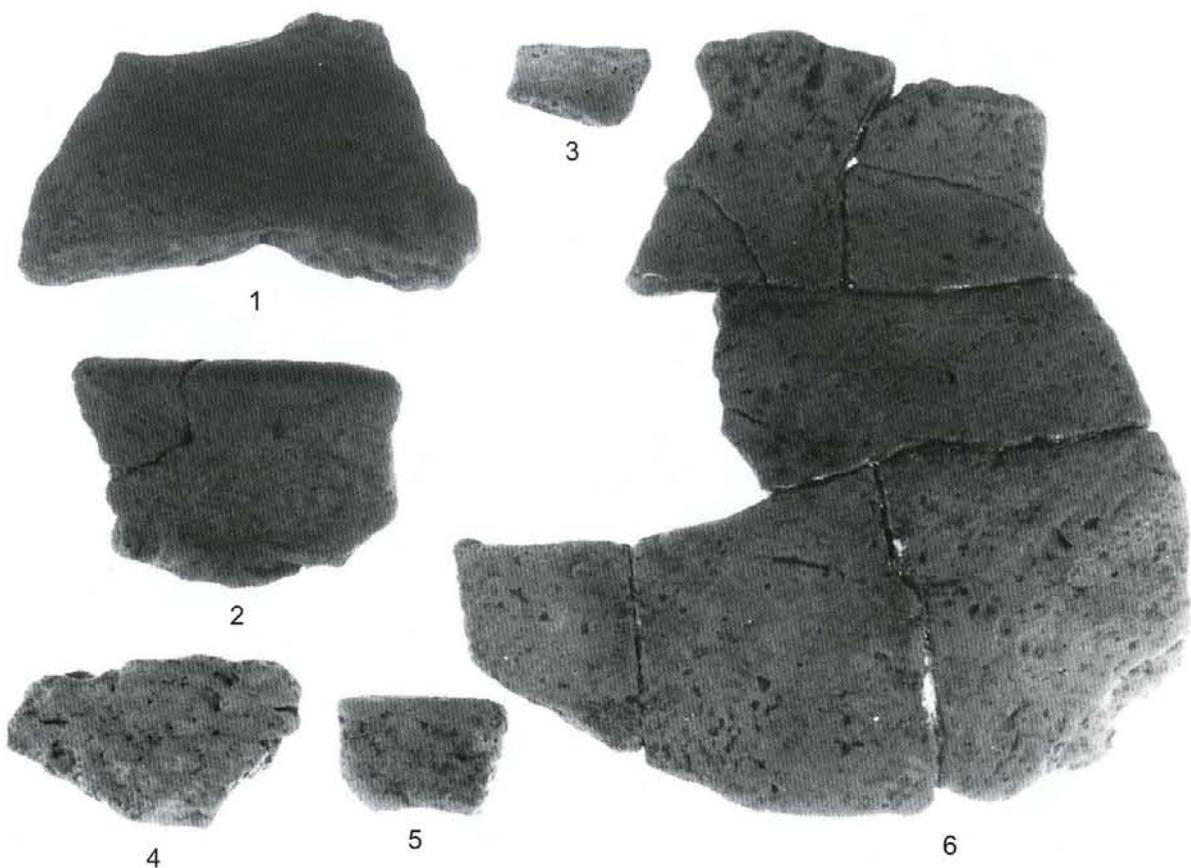
図版4 発掘調査状況



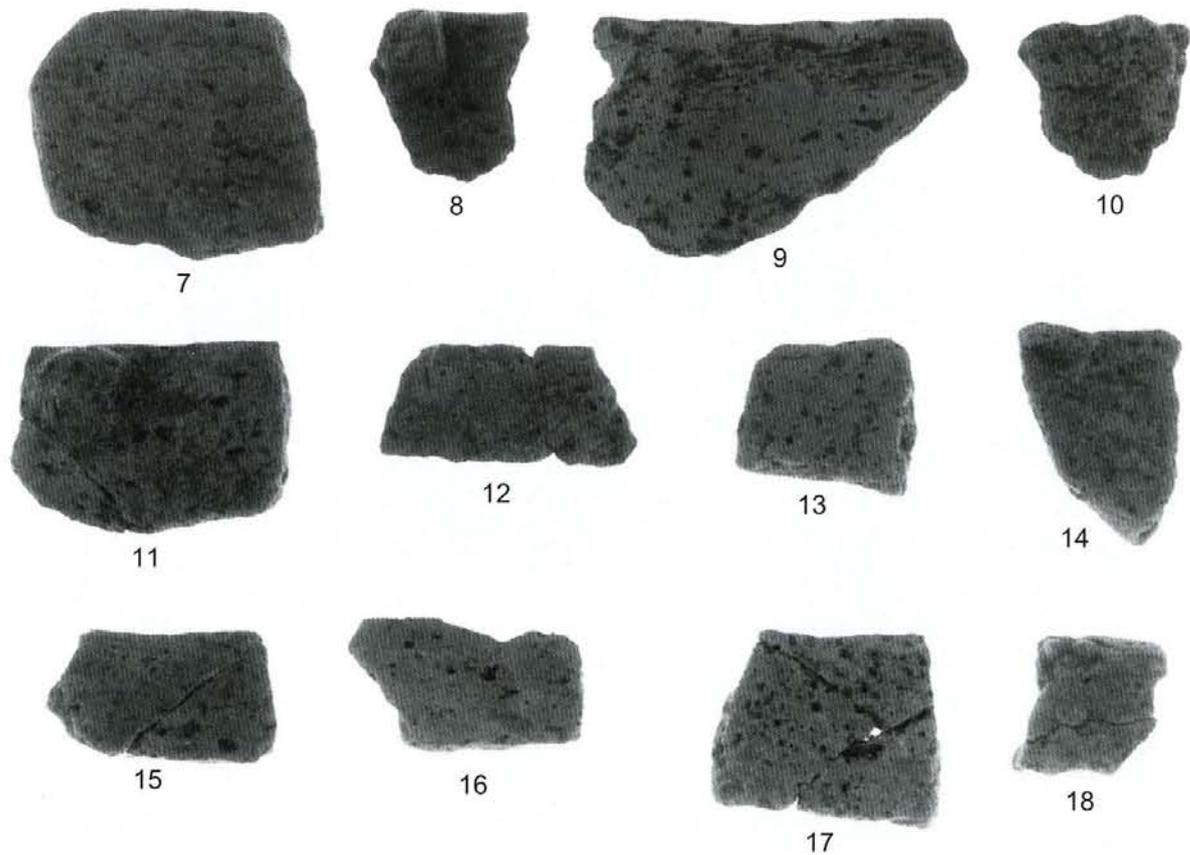
図版5 Cラインの層序



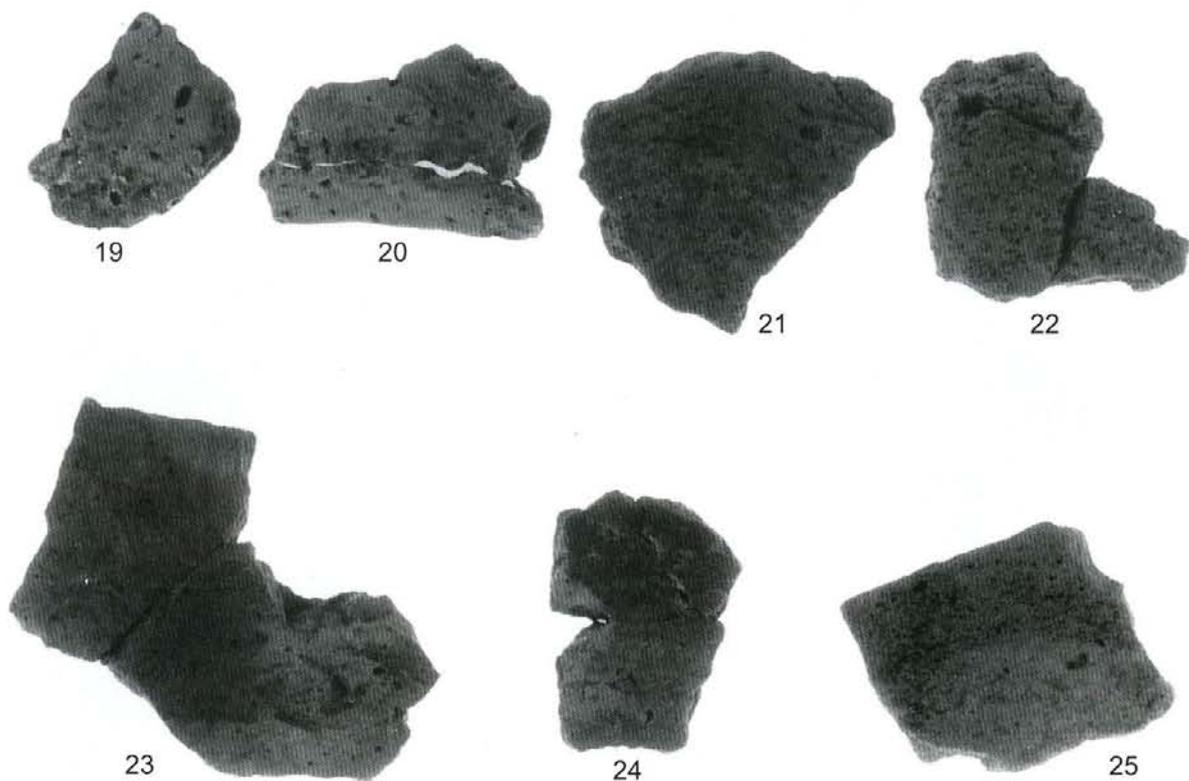
図版6 古墓群遠景



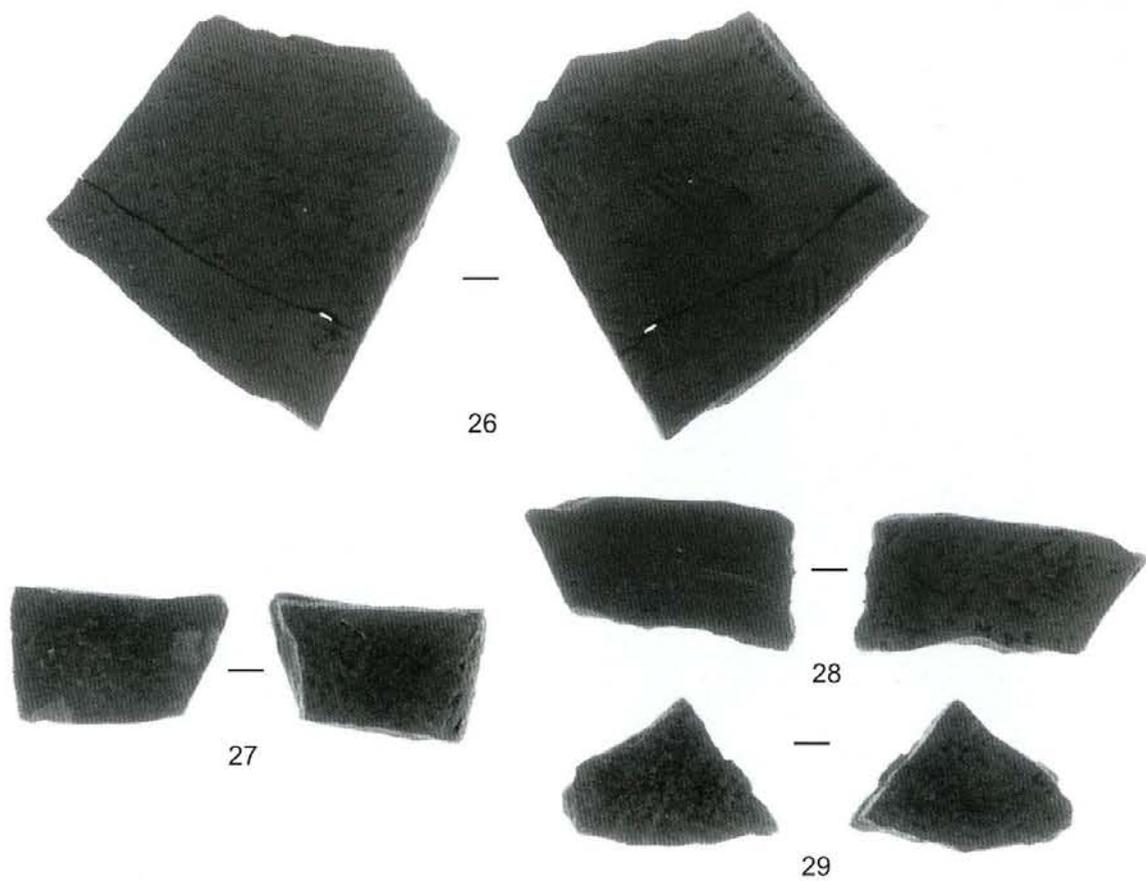
图版7 土器



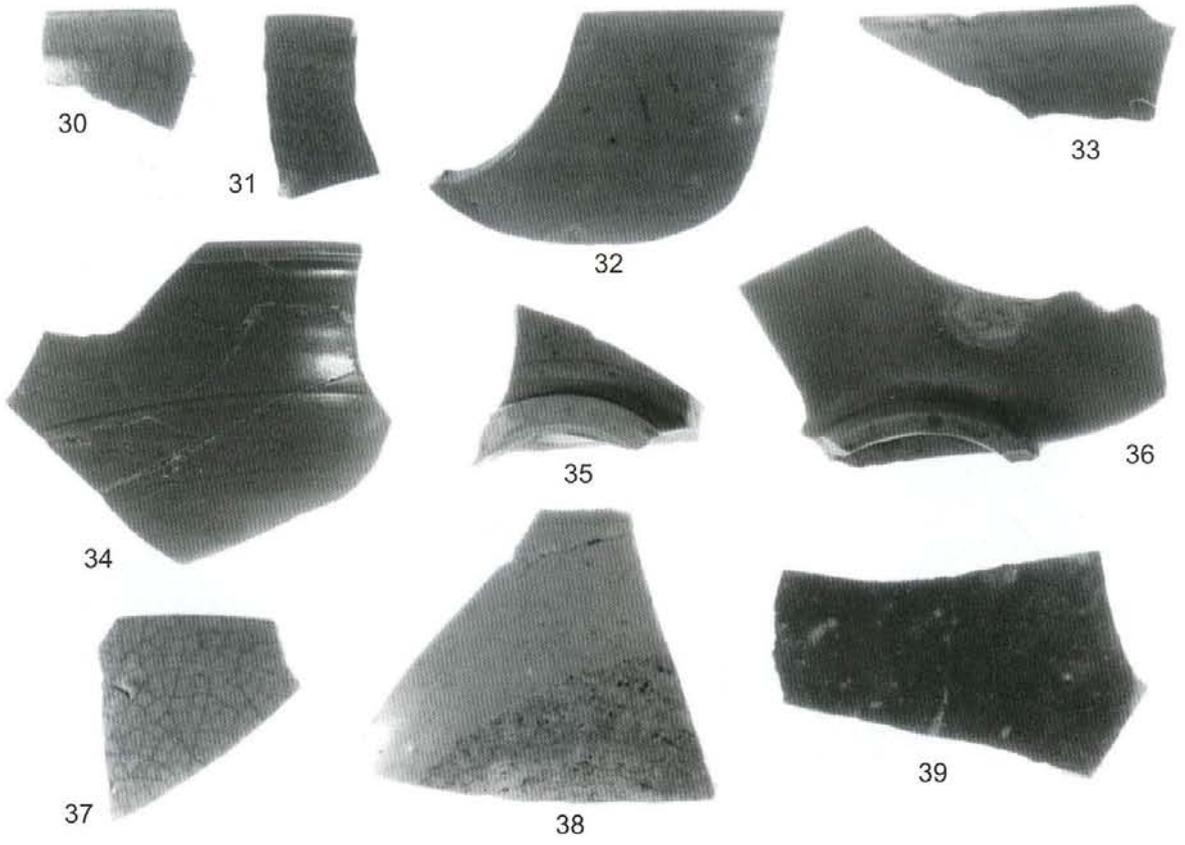
图版8 土器



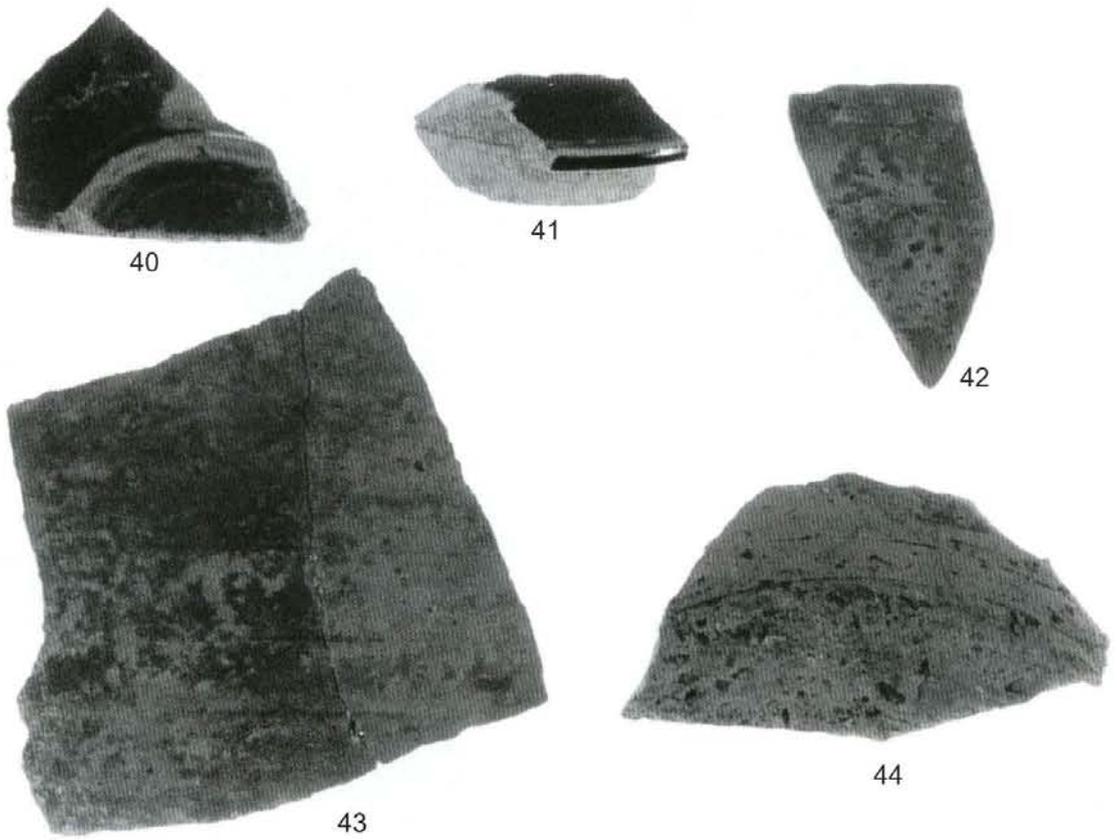
図版9 土器底部



図版10 カムイ焼



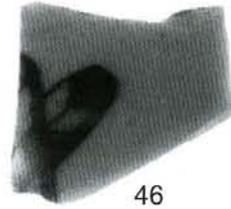
図版 1 1 青磁 (30~36)、白磁 (37・38)、褐釉陶器 (39)



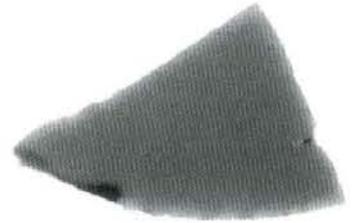
図版 1 2 沖縄産陶器



45



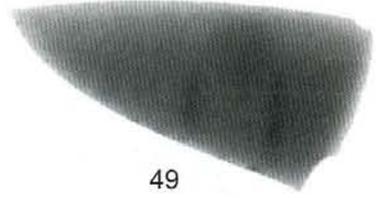
46



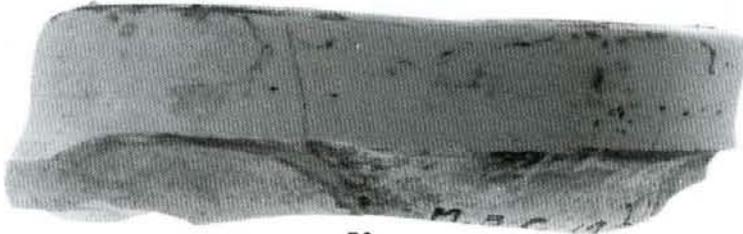
47



48



49



50

図版 1 3 本土産磁器



51

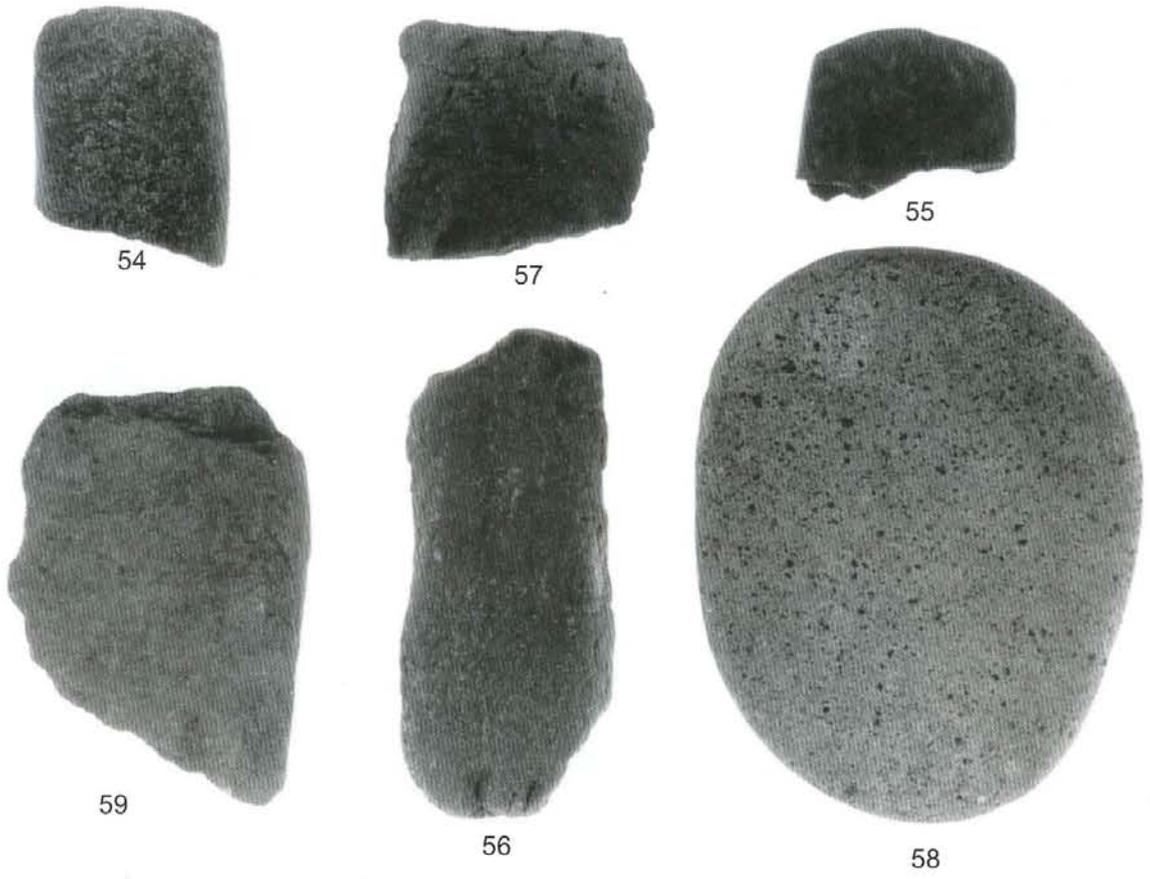


52

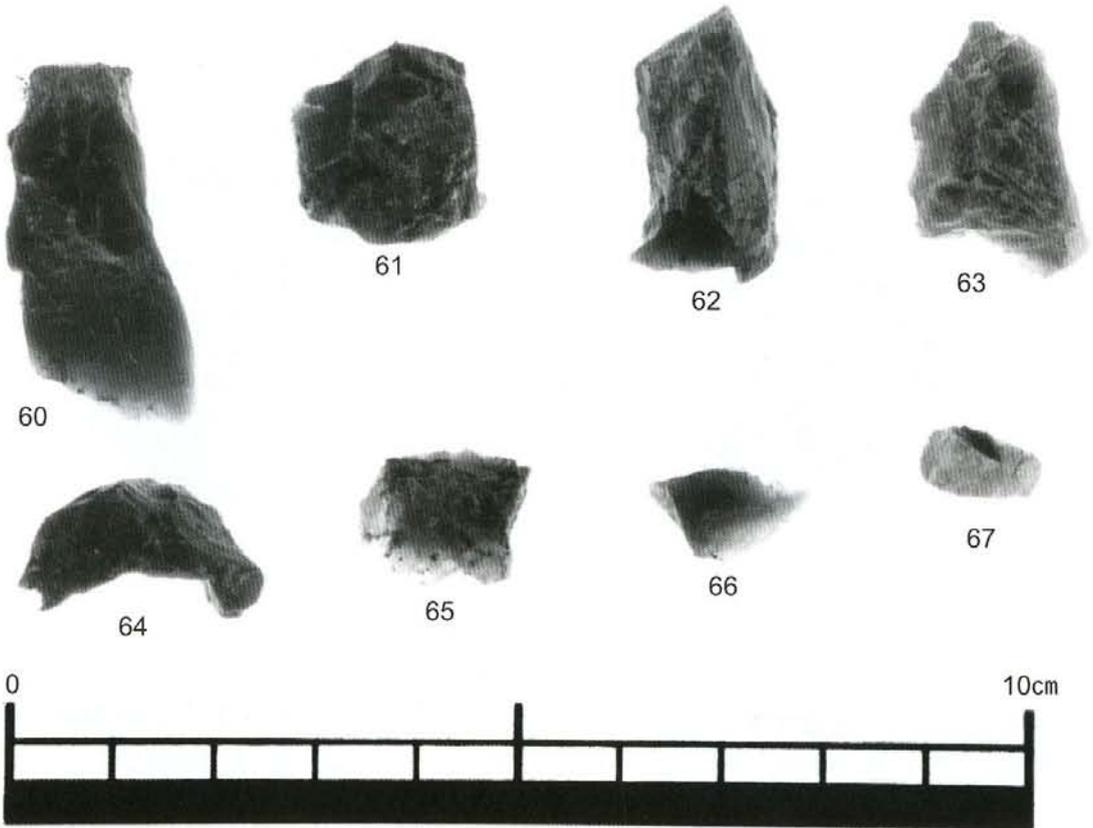


53

図版 1 4 古瓦 (51)、滑石製品 (52)、刀子 (53)



図版15 石器



図版16 チャート片

浦添市文化財調査報告書 第26集

真久原遺跡

—老人保健施設「てだこ苑」建設に伴う緊急発掘調査—

発行 浦添市教育委員会
浦添市宮城二丁目4番1号
電話 098-877-4556

印刷 (有)ブラザー印刷